

〔原著〕

地域育児グループ・ひろばの特性と育児ストレスの関連

筑波大学大学院人間総合科学研究科：工藤 麗弥
筑波大学大学院人間総合科学研究科：佐藤 純

Association between feature of community childcare groups
and spaces and childcare stress

Tsugumi Kudo and Jun Sato

問題と目的

現在、わが国においては少子化や子育て不安をめぐる問題が指摘されて久しく、政府は「少子化社会対策基本法」「次世代育成支援対策基本法」の成立や児童福祉法改正といった動きを見せている。しかし、社会や地域が十分に子育てを支援する環境にあるかについて、国民の間では「不十分」との意識が強い（こども未来財団、2004）ことから、さらなる子育て支援の充実が必要であるといえる。

乳幼児をもつ母親の社会的ネットワークは、母親の子どもに対する情動面を活性化し、子育てに関する経験を増やす場として役立ち（こども未来財団、2004）、育児ストレスを軽減させ（園部・白川・廣瀬・寺本・高橋・平松・斉藤・山崎・三国・岡光、2006）、育児不安を軽減させ、子どものよりよい発達につながるなど、育児支援の重要な要素として考えられている。

なかでも、育児サークルや親子の集まるひろば（以下、育児グループ・ひろば）は、子育て家庭がよく利用する子育て支援の60%以上を占めている（金子、2006）。このことから、育児グループ・ひろばは母親の重要な社会的ネットワークのひとつであり、育児中の母親のストレス軽減に影響を与えていると推察される。

ソーシャルサポート源としての友人の重要性は、母親がいつも相談する相手として、友人が夫（85.7%）について2位（73.5%）であること（中村・小山・原田・松田・山岡・斉藤・長

坂・西郷・吉田・井深、2002）や、約6割の母親が友人から心理的サポートを受けていると感じている（荒木・大石・岩木・渡辺・池田・達田・小川、2001）ことから明らかである。したがって、母親の主要な社会的ネットワークを構成し、家族に次ぐ重要なソーシャルサポート源である友人が作られる育児グループ・ひろばと育児ストレスとの関連を明らかにする必要があると考えられる。

中村ら（2002）は、実際に育児グループ・ひろばがどのような機能をもっているかについて、自助の子育てグループの研究において、子育てグループ参加者から「子育て仲間知り合えた」「子育ての悩みや不安が解消」といった「ポジティブな感想」や、「子ども同士のトラブル」「役割分担が負担」といった「ネガティブな感想」といった様々な感想を抽出している。これら個人の感想は、グループに参加することによって得られる効果ということが出来るであろう。このようなグループ参加の効果が育児ストレスと関連していると考えられる。しかし、育児グループ・ひろばへの参加と育児ストレスとの関連を直接的に扱った研究は少ない。

現在、子育て支援事業は様々な展開をみせている。その中でも、恒常的に参加する機会がある育児グループ・ひろばの形態が母親同士の社会的ネットワークを構築する点で重要であると考えられる。そこで、本研究ではその育児グループ・ひろばを4種類に分類し、それらを操作的にサークル、ひろば、相互保育学級、子育

てクラブと命名する。

サークルとは、育児中の母親が自発的に作ったグループであり、その多くは母親のみで構成される、10人前後の比較的小さな集団である。メンバーは不定期的に穏やかに流動する。ひろばとは、特に決まったメンバーがいるわけではなく、特定の曜日・時間に場所が確保されており、育児中の母親が自由に集まり解散するものである。多くはボランティアによって運営されているが、中には行政が主導しているひろばもある。参加する母親の人数は日によって異なる。相互保育学級とは、行政主導で行われるものであり、年度単位で参加者が募集される。参加者は2つの班に分かれ、一回交代で一方の班が講座を受け、もう一方の班が2班分の子どもの保育を行うものである。一学級30組程度のところが多い。子育てクラブとは、全国的な組織をもつもので、参加者は居住地域に近いクラブに応募する。

育児サークル・ひろばは一種の集団であるといえる。集団にはそれぞれ特色があり、それらは規範や凝集性、相互依存性といった様々な特性から捉えなおすことが可能である。集団の様々な特性はそこへ属もしくは関連する個人の行動ないし意識に大きな影響を与えられられている (e.g., Tomas, 1957; Zelst, 1952; ホッグ, 1994)。そのため、育児グループ・ひろばといった集団に参加する母親の育児ストレスや参加の効果を検討するにあたり、集団の特性の影響を無視することはできない。広田 (1963) は集団が個人に与える影響として大きく二つの側面を挙げている。1つ目が集団の分化された部分間に確立された関係の強さの要因である集団構造的決定因、2つ目が集団のまとまりを良くするように働く集団統合的決定因である。集団構造的決定因には役割やリーダーの有無など、集団統合的決定因には集団内の規範、凝集性、おしゃべりなどが含まれると考えられる。本研究では、この2つの集団決定因を集団の心理的特性として扱うものとする。

以上より、本研究ではそれぞれの育児グループ・ひろばの特徴と、そこへ参加することの効

果や参加者の育児ストレスとの関連を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象 市内の4つの育児サークル (32名)、3つのひろば (40名)、3つの子育てクラブ (37名)、2つの相互保育学級 (31名) に参加している母親計140名を対象とした。年齢は24~44歳、平均年齢は34.11歳 (SD = 1.13) であった。

調査時期 2007年9月13日から10月30日に実施した。

調査実施手続き 個別自記式の質問紙調査で実施された。育児サークル、母親クラブ、乳幼児家庭教育学級については、一斉に配布し、自宅に持ち帰って実施された。ひろばについては個別配布・個別回収形式で実施された。調査票は封のされた封筒で回収された。回答依頼時に文書と口頭で説明合意しており、謝礼は提示しなかった。

調査内容 調査内容は以下の通りであった。

- ① フェイスシート：子どもの数、子どもの年齢、母親の年齢、母親の職業、家族構成員、最終学歴、現在参加している育児グループ・ひろばの数の記入を求めた。
- ② 育児グループ・ひろばにおけるルールに関する意識：集団統合的決定因 (広田, 1963) のうち、調査対象者が属する育児グループ・ひろばにおけるルールの存在の認知を把握するために「このグループ・ひろばにははっきりとしたルールがあると思う」1項目について、「あてはまらない (1点)」「あまりあてはまらない (2点)」「どちらともいえない (3点)」「ややあてはまる (4点)」「あてはまる (5点)」の5件法で回答を求めた。以下、③~⑦は同様の5件法で回答を求めた。
- ③ 育児グループ・ひろばの凝集性に関する意識：集団統合的決定因のうち調査対象者が属する育児グループ・ひろばにおける凝集性の認知を把握するために使用した。集団態度尺度からの凝集性項目 (Evans & Jarvis, 1986)、

スポーツ凝集性質問表 (Martens & Peterson, 1972)、集団凝集性尺度 (Stokes, 1983) から、集団内の親密性の報告及び集団内の個人に対する魅力に関する 6 項目を抜粋し、語句を修正して使用した。

- ④ 育児グループ・ひろばのリーダーに関する意識：集団構造的決定因 (広田, 1963) のうち、調査対象者が属する育児グループ・ひろばにおける参加者内のリーダーの有無についての認知を把握するために使用した。「参加者の母親の中にリーダーの役割をしている人がいると思う」1 項目。
- ⑤ 集団フォーマル性尺度：集団構造的決定因のうち調査協力が属する育児グループ・ひろばにおける役割の認知を把握するために、集団フォーマル性尺度 (新井, 2004) から 4 項目を抜粋し、語句を修正して使用した。
- ⑥ 育児グループ・ひろば参加の効果尺度：育児グループ・ひろばに参加して得られた効果を測定する 19 項目を独自に作成した。作成に当たっては予備調査での「育児グループ・ひろばに参加して良かったこと、嫌なこと、息抜きになっているかどうか」への回答内のポジティブな項目および中村 (2001) のグループに参加した感想のうち「ポジティブな感想」を参考にした。
- ⑦ 子育てづきあい積極的親和性尺度：母親の個人特性が育児グループ・ひろば参加の効果及び育児ストレスに及ぼす影響を分析するため、山岡 (2002) が作成した、母親の対人関係における個人特性のうち、社交性や親和性を測定する 19 項目の尺度を使用した。
- ⑧ 育児グループ・ひろばにおけるおしゃべりに関する意識：集団統合的決定因のうち、調査協力が属する育児グループ・ひろば内のおしゃべりの多さの認知についての質問。「このグループ・ひろば内で他のお母様とおしゃべりすることが多いですか」1 項目について、「多い (5 点)」「やや多い (4 点)」「どちらともいえない (3 点)」「やや少ない (2 点)」「少ない (1 点)」の 5 件法で回答を求めた。
- ⑨ 育児グループ・ひろばにおけるおしゃべり

時間：⑧と同様の目的で、グループの総活動時間数および特定活動時間以外の時間、特定活動時間中のおしゃべり時間数および特定活動以外の時間中のおしゃべり時間数の記入を求めた。

- ⑩ 育児グループ・ひろばにおける安心に関する意識：所属する育児グループ・ひろばでの母親の子どもに関する被拘束度を測定するために使用した。「特定の活動をしている時以外で、このグループ・ひろば内で、お子さんから安心して目を離すことができますか」1 項目について、「そう思う (5 点)」「ややそう思う (4 点)」「どちらともいえない (3 点)」「あまり思わない (2 点)」「まったく思わない (1 点)」の 5 件法で回答を求めた。
- ⑪ 育児グループ・ひろばへの参加頻度：育児グループ・ひろばへの参加率を算出するため、グループ・ひろばの月の活動回数およびひと月に参加する回数の記入を求めた。
- ⑫ 育児ストレス感尺度 (泊, 2000)：育児期の母親達が抱える様々な心理的・身体的ストレス反応を測定する尺度である。32 項目それぞれについて、「全くそう感じない (1 点)」「あまりそう感じない (2 点)」「ややそう感じる (3 点)」「そう感じる (4 点)」「非常にそう感じる (5 点)」の 5 件法で回答を求めた。

結 果

1. 育児グループ・ひろば参加の効果尺度の尺度構成および信頼性の検討

育児グループ・ひろば参加の効果について、質問紙に不備のあった 1 項目を除いた 18 項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が .35 以下であった 2 項目を除き再び同様の手順で因子分析を行った。抽出された各因子とそれに含まれる項目、基礎統計量、共通性、因子負荷量および α 係数をまとめたものを Table 1 に示す。なお、各因子の代表項目の単純合計得点を下位尺度得点とした。第 1 因子に負荷量の高い項目は「ス

Table 1 過去に受けたいじめ被害尺度の因子分析結果 (主因子法, バリマックス回転)

尺度全体	平均値	I	II	III	IV	共通性
因子1 気分転換 ($\alpha = .88$)						
8. ストレス発散になる	4.32 (.86)	.81	.06	.00	-.02	.71
12. 気分転換になる	4.63 (.62)	.80	.00	-.19	-.04	.51
9. 家の中で遊ばせる時よりもイライラしない	4.38 (.98)	.75	-.12	-.15	.09	.44
10. 親子で楽しい時を過ごせる	4.48 (.70)	.70	-.07	.09	.13	.61
2. 出かけるところがあって気がまぎれる	4.54 (.73)	.61	.17	.19	-.28	.55
11. 子育て仲間知り合える	4.65 (.55)	.49	.18	-.02	.02	.39
7. 親子ともに友人が増える	4.53 (.65)	.45	.27	.12	-.07	.48
14. 役立つ情報を得られる	4.42 (.66)	.38	.27	-.09	.23	.46
因子2 悩み・不安解消 ($\alpha = .76$)						
5. 母親同士、共通の悩みを話し合える	4.42 (.75)	.07	.85	.09	-.09	.83
1. 先輩ママから育児のことを学べる	3.93 (1.10)	-.02	.56	-.09	.14	.33
17. 悩みや不安が解消できる	3.83 (.85)	.11	.52	-.03	.30	.58
因子3 母子の運動性・活発性の向上 ($\alpha = .71$)						
4. 遊びの種類が増える	3.86 (.96)	-.15	.04	.82	.05	.64
3. 自分の運動になる	3.28 (1.14)	-.10	-.02	.73	.05	.49
6. 子どもが活発になる	4.33 (.78)	.19	-.14	.38	.31	.41
因子4 子どもの成長・教育 ($\alpha = .78$)						
16. 子どものしつけや教育に役立つ	3.83 (.88)	-.21	.25	-.01	.88	.81
15. 子どもの社会性などの能力を育てるのに役立つ	4.35 (.83)	.26	-.16	.17	.62	.64
因子間相関						
	1		.65	.50	.46	
	2			.49	.39	
	3				.46	

注) () 内は標準偏差。

トレス発散になる」「気分転換になる」「家の中で遊ばせる時よりもイライラしない」など、気分の改善を示す項目であり、「気分転換」因子と命名された。第2因子に負荷量の高い項目は「母親同士、共通の悩みを話し合える」「先輩ママから育児のことを学べる」など、同じ母親の立場で生起する共通の悩みや不安の解消を示す項目で、「悩み・不安解消」因子と命名された。第3因子に負荷量が高い項目は「遊びの種類が増える」「自分の運動になる」など、親子の活動の種類・量の増加を示す項目であり、「母子の運動性・活発性の向上」因子と命名された。第4因子に負荷量が高かったのは「子どものしつけや教育に役立つ」「子どもの社会性などの能力を育てるのに役立つ」など、子どもの社会的な成長や教育への役立ちを示す項目であり、「子どもの成長・教育」因子と命名された。

2. 母親の特徴

各育児グループ・ひろばに参加している母親の傾向を明らかにするため、参加している母親の年齢、子どもの数、末子年齢、参加している場所の数、子育てづきあい積極的親和性尺度の下位尺度得点について、サークル・ひろば・相互保育学級・育児クラブの4群で分散分析を行った。各群の平均値および分散分析の結果をTable 2に示す。

検定の結果、母親の年齢に関して有意な差が見られた。また、子どもの数、末子の年齢に関しても有意な差が見られた。しかし、参加している場所の数、積極的社交性および消極的内向性に関しては有意な差は見られなかった。

有意な差が見られた変数については、等分散性が仮定されたものはTukey法、等分散性が仮定されなかったものはDunnnettのT3法で多重

Table 2 各集団別の母親の特徴の平均値と標準偏差，分散分析結果

		①サークル	②ひろば	③学級	④クラブ	F 値	多重比較
母親の年齢	N	32	37	31	37	3.02*	③>②*
	M	34.59	32.51	35.13	34.43		
	SD	3.67	4.35	2.79	4.38		
子どもの数	N	32	40	31	37	9.83**	③, ④>②** ①>②*
	M	1.56	1.20	1.94	1.68		
	SD	0.62	0.41	0.73	0.58		
末子の年齢	N	32	40	31	37.00	6.63**	①, ④>②**
	M	1.84	1.05	1.32	2.03		
	SD	1.17	0.71	1.14	1.24		
場所数	N	32	37	31	37	n.s.	
	M	1.69	2.24	1.71	1.84		
	SD	0.86	1.01	1.04	0.83		
積極的社交親和性	N	32	40	31	37	n.s.	
	M	9.69	10.45	10.42	9.19		
	SD	2.36	3.07	2.55	2.01		
消極的内向性	N	32	39	31	37.00	n.s.	
	M	6.56	6.41	6.16	6.46		
	SD	2.08	2.44	2.07	1.94		

注) 学級=相互保育学級, クラブ=子育てクラブ。

** $p < .01$, ** $p < .05$ 。

比較を行った。以後，多重比較に関しては上記と同様の手続きを行った。

多重比較の結果，母親の年齢は相互保育学級がひろばよりも高かった。子どもの数は，サークル・相互保育学級・子育てクラブがひろばよりも有意に多かった。末子の年齢は，サークル・子育てクラブがひろばよりも有意に高かった。

したがって，ひろばに参加する母親のほうが他のグループに参加する母親よりも若く，子どもが少なく，末子が幼いことが明らかになった。

3. 育児グループ・ひろばの特徴

各育児グループ・ひろばの集団の特徴を明らかにするため，集団統合的決定因全体およびルール，凝集性，おしゃべり，集団構造的決定因全体およびリーダー，役割，安心度および参加率についてサークル・ひろば・相互保育学級・子育てクラブの4群で分散分析を行った。各群の平均値および分散分析の結果を Table 3 に示す。検定の結果，集団統合的決定因全体，ルール，凝集性，集団構造的決定因全体，リーダー，役割，参加率に関して有意な差が見られ

た。しかし，おしゃべり，安心度に関しては有意な差は見られなかった。有意な差が見られた変数については，多重比較を行った。

多重比較の結果，集団統合的決定因全体はサークルがひろば・学級・子育てクラブより有意に高かった。また，相互保育学級が子育てクラブより有意に高かった。ルールは相互保育学級がサークル・ひろば・子育てクラブよりも有意に高かった。凝集性はサークルがひろば・子育てクラブよりも有意に高かった。また，相互保育学級は子育てクラブより有意に高かった。

集団構造的決定因全体は，相互保育学級・子育てクラブがサークルより，さらにサークルがひろばより高かった。リーダーはサークル・相互保育学級が子育てクラブより，さらに子育てクラブがひろばよりも有意に高かった。役割は相互保育学級・子育てクラブがサークル・ひろばよりも有意に高かった。

参加率は，相互保育学級・子育てクラブがサークルより，さらにサークルがひろばより高かった。

したがって，集団統合的決定因，特に凝集性

Table 3 各集団の特徴の平均値と標準偏差, 分散分析結果

		①サークル	②ひろば	③学級	④クラブ	F値	多重比較
統合的決定因全体	N	32	35	31	34	10.56**	①>②③④**
	M	33.44	28.83	30.87	27.09		③>④*
	SD	5.16	4.34	3.98	5.62		
ルール	N	32	36	31	36	9.86**	③>①②④**
	M	3.47	3.06	4.48	3.50		
	SD	1.41	0.98	0.72	1.16		
凝集性	N	32	36	31	34	14.01**	①>②④**
	M	25.72	21.83	22.39	19.53		③>④*
	SD	3.43	4.02	3.36	4.61		
おしゃべり	N	32	39	31	37	n.s.	
	M	4.25	4.03	4.00	4.08		
	SD	1.08	1.06	0.97	0.89		
構造的決定因全体	N	31	35	31	35	28.49**	③>①>②**
	M	13.65	9.89	17.94	16.14		④>①*
	SD	4.09	4.06	3.75	3.20		
リーダー	N	32	36	31	36	18.72**	①③④>②**
	M	4.63	2.97	4.48	3.92		①>③>④*
	SD	0.87	1.36	0.77	0.91		
役割	N	31	35	31	35.00	26.58**	③④>①②**
	M	9.00	6.97	13.45	12.23		
	SD	3.92	3.02	3.32	3.01		
参加率	N	28	28	28	32	25.00**	③>①>②**
	M	0.84	0.65	0.99	0.94		④>②**
	SD	0.15	0.25	0.03	0.15		④>①*
安心度	N	30	37	29	36.00	n.s.	
	M	3.83	3.49	3.55	3.22		
	SD	0.83	0.99	1.09	0.93		

注) 学級=相互保育学級, クラブ=子育てクラブ。

** $p < .01$, ** $p < .05$ 。

ではサークルや相互保育学級が子育てクラブやひろばより高いが、ルールに関しては相互保育学級が他の3群より高いことがいえる。また、集団構造的決定因、特に役割に関しては相互保育学級・子育てクラブがサークルやひろばより高いが、役割に関してはサークル・相互保育学級が子育てクラブやひろばよりも高いことが分かる。参加率は集団構造的決定因および役割と同様の順となった。

4. 育児グループ・ひろばの種類別に見た効果・育児ストレス感

各育児グループ・ひろばに参加している母親が感じている効果および育児ストレス感を明ら

かにするため、集団統合的決定因全体およびルール、凝集性、おしゃべり、集団構造的決定因全体およびリーダー、役割、安心度および参加率についてサークル・ひろば・相互保育学級・子育てクラブの4群で分散分析を行った(Table 4)。ただし、育児ストレス感全体および育児ストレス感の下位尺度においては有意な差が見られなかった。検定の結果、効果全体、気分転換、悩み・不安解消、子どもの成長・教育において有意な差が見られた。しかし、運動性・活発性の向上においては有意な差が見られなかった。

多重比較の結果、効果全体はサークル・ひろばが相互保育学級・子育てクラブよりも有意に

Table 4 各集団の種類数別に見た効果の評価得点の平均値と標準偏差，分散分析結果

		①サークル	②ひろば	③学級	④クラブ	F 値	多重比較
効果全体	N	31	39	31	37	8.73**	①>③④** ②>④** ②>③*
	M	71.45	70.10	65.55	63.41		
	SD	6.50	7.68	5.74	9.29		
気分転換	N	32	40	31	37	5.63**	①>④** ②>④*
	M	37.50	36.90	35.23	34.00		
	SD	2.91	3.69	3.91	5.05		
悩み・不安解消	N	32	39	31	37	12.61**	①>③④** ②>④** ②>③*
	M	13.25	13.08	11.58	10.81		
	SD	1.95	1.86	1.65	2.36		
運動性・活発性の向上	N	32	40	31	37	n.s.	
	M	12.13	11.78	10.74	11.08		
	SD	2.03	2.63	1.97	2.25		
子どもの成長・教育	N	32	40	30	37	4.53**	①>④** ②>④*
	M	8.72	8.50	8.07	7.51		
	SD	1.33	1.50	1.62	1.50		

注) 学級=相互保育学級, クラブ=子育てクラブ。

** $p < .01$, *** $p < .05$ 。

高かった。気分転換はサークル・ひろばが子育てクラブより有意に高かった。悩み・不安の解消はサークル・ひろばが相互保育学級よりも有意に高かった。子どもの成長・教育はサークル・ひろばが子育てクラブより有意に高かった。

したがって、効果全体、悩み・不安の解消に関してサークル・ひろばは相互保育学級や子育てクラブが高く、気分転換、子どもの成長・教育に関してはサークル・ひろばは子育てクラブより高かった。

5. 育児グループ・ひろばの集団統合的決定因と参加の効果、育児ストレス感との関連

育児ストレス感、参加の効果、集団統合的・集団構造的決定因の関連を明らかにするため、4種類の育児グループ・ひろばごとに重回帰分析によるパス解析を行った。第1水準は集団統合決定因の3変数（ルール、凝集性、おしゃべり）および集団構造的決定因の2変数（リーダー、役割）の2変数であり、第2水準は育児グループ・ひろば参加の効果の4変数（気分転換、悩み・不安解消、運動性・活発性の向上、子どもの成長・教育）であり、第3水準は育児ストレス感の5変数（社会的孤立感・孤独感、

自信欠如・自責、子育て否定感、感情の不安定感、子育て疲労感）であった。

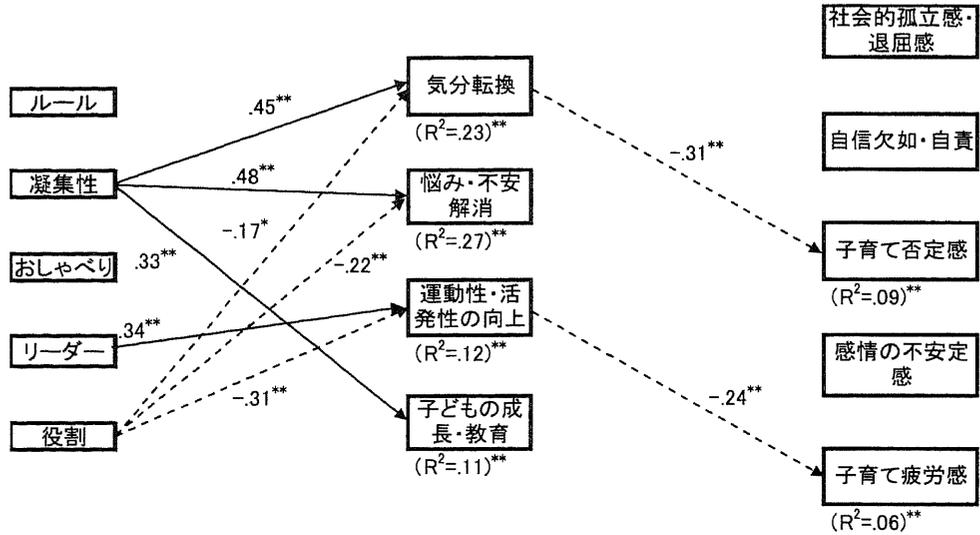
ステップワイズ法の重回帰分析によって行い、第3水準の5変数を基準変数にして第2水準の変数を説明変数とする解析と、第2水準の4変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析を行った。いずれも、偏回帰係数の有意水準5%基準で投入した。

1) 調査対象者全体

調査対象者全体でパス解析を行った。N = 140であった。解析の結果を Figure 1 に示す。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。

まず、第2水準の4変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析では、すべての育児グループ・ひろば参加の効果の下位尺度への回帰式が有意となった。

図から分かるように、「気分転換」・「悩み・不安の解消」は凝集性から正の、役割から負のパスを受けていた。「運動性・活発性の向上」はリーダーから正の、役割から負のパスを受けていた。また、「子どもの成長・教育」は凝集性から正のパスを受けていた。



注)**は $p < .01$, *は $p < .05$ を表す。

Figure 1 統合的・構造的決定因が参加の効果, 育児ストレス感に及ぼす影響を検討するパス解析の結果

次に、第3水準の5変数を基準変数にして第2水準の変数を説明変数とする解析では、「子育て否定感」への回帰式が有意となった。また、「子育て疲労感」への回帰式も有意となった。「子育て否定感」は「気分転換」から負のパス, 「子育て疲労感」は「運動性・活発性の向上」から負のパスを受けていた。また、凝集性は「気分転換」を介して「子育て否定感」に影響していた。さらに、リーダー、役割は「運動性・活発性の向上」を介して「子育て疲労感」に影響していた。

2) サークル

サークルの調査対象者群でパス解析を行った。N = 32であった。解析の結果を Figure 2 に示す。

まず、第2水準の4変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析では、「悩み・不安の解消」への回帰式が有意となった。また、「子どもの成長・教育因子」への回帰式も有意となった。図から分かるように、「悩み・不安解消」および「子どもの成長・教育」は凝集

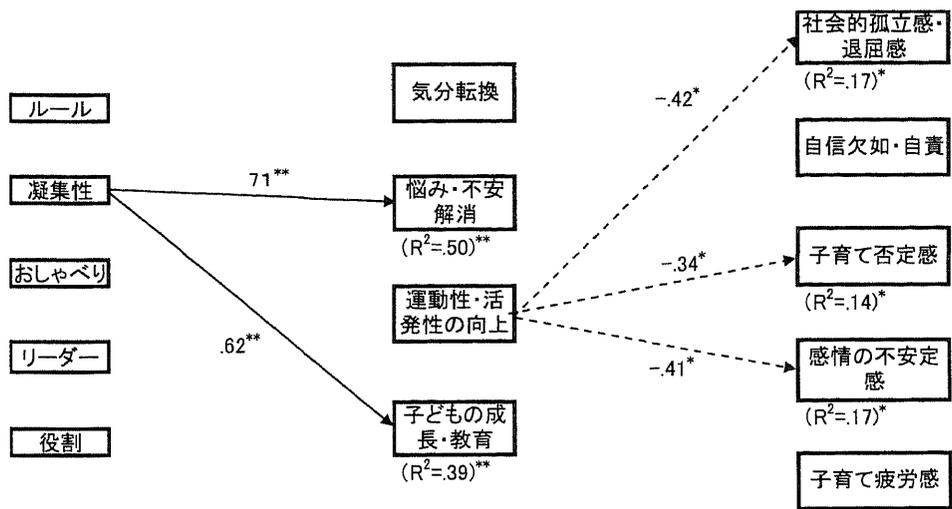
性から正のパスを受けていた。

次に、第3水準の5変数を基準変数にして第2水準の変数を説明変数とする解析では、「社会的孤立感・退屈感」への回帰式が有意となった。また、「子育て否定感」への回帰式も有意となった。さらに、「感情の不安定感」への回帰式も有意となった。「社会的孤立感・退屈感」「子育て否定感」「感情の不安定感」は「運動性・活発性の向上」から負のパスを受けていた。しかし、参加の効果を通じた集団統合的・構造的決定因の間接的な影響はみられなかった。

3) ひろば

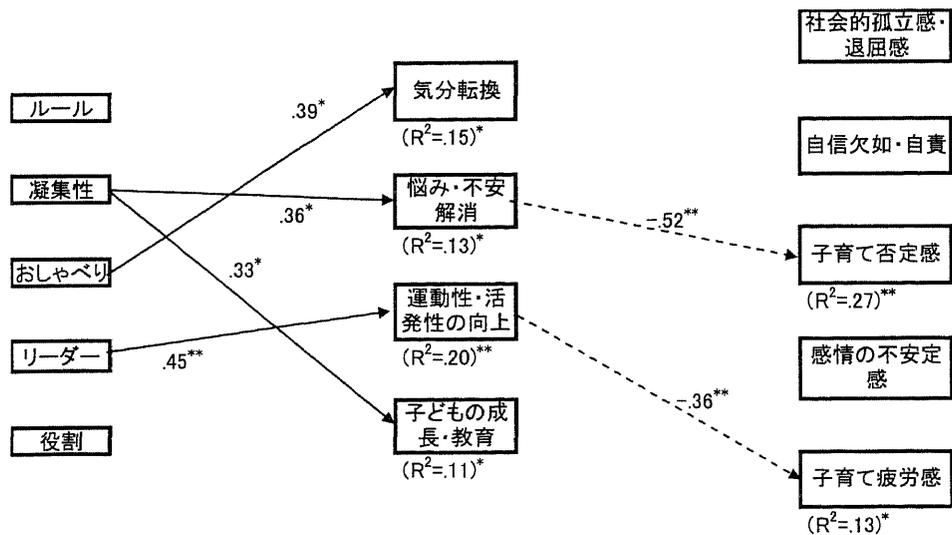
ひろばの調査対象者群でパス解析を行った。N = 40であった。解析の結果を Figure 3 に示す。

まず、第2水準の4変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析では、すべての育児グループ・ひろばが参加の効果の下位尺度への回帰式が有意となった。「気分転換」はおしゃべりから正のパスを受けていた。また、



注)**は $p < .01$, *は $p < .05$ を表す。

Figure 2 サークルにおける統合的・構造的決定因が参加の効果, 育児ストレス感に及ぼす影響を検討するパス解析の結果



注)**は $p < .01$, *は $p < .05$ を表す。

Figure 3 ひろばにおける統合的・構造的決定因が参加の効果, 育児ストレス感に及ぼす影響を検討するパス解析の結果

「悩み・不安解消」「子どもの成長・教育」は凝集性から正のパスを受けていた。「運動性・活発性の向上」はリーダーから正のパスを受けていた。

次に、第3水準の5変数を基準変数にして第2水準の変数を説明変数とする解析では、「子育て否定感」への回帰式が有意となった。また、「子育て疲労感」への回帰式も有意となった。「子育て否定感」は「悩み・不安解消」から負のパス、「子育て疲労感」は「運動性・活発性の向上」から負のパスを受けていた。また、凝集性は「悩み・不安の解消」を介して「子育て否定感」へ影響していた。さらに、リーダーは「運動性・活発性の向上」を介して「子育て否定感」へ影響していた。

4) 相互保育学級

相互保育学級の調査対象者群でパス解析を行った。N = 31であったが、有意な回帰式はみられなかった。

5) 子育てクラブ

子育てクラブの調査対象者でパス解析を行っ

た。N = 37であった。解析の結果を Figure 4 に示す。

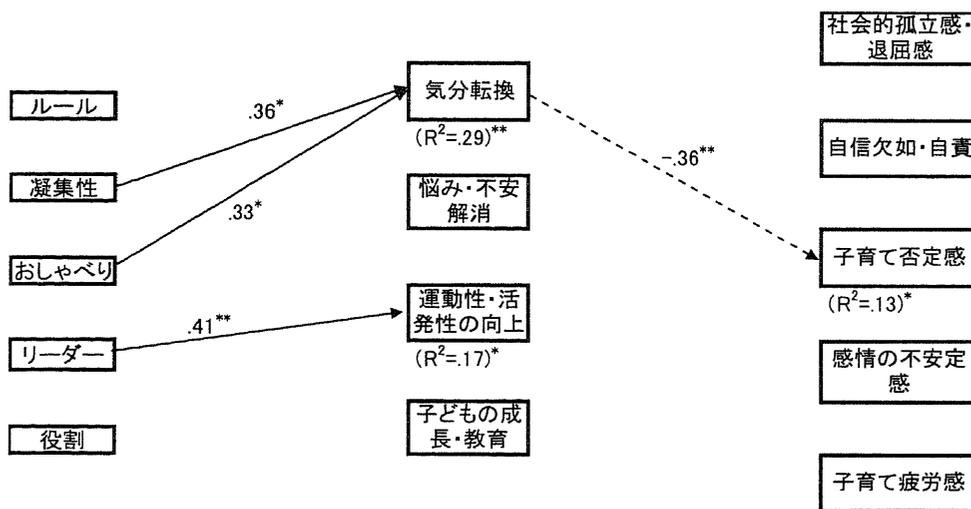
まず、第2水準の4変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析では、「気分転換」への回帰式が有意となった。また、「運動性・活発性の向上」への回帰式も有意となった。「気分転換」は凝集性およびおしゃべりから正のパスを受けていた。また、「運動性・活発性の向上」はリーダーから正のパスを受けていた。

次に、第3水準の5変数を基準変数にして第2水準の変数を説明変数とする解析では、「子育て否定感」への回帰式が有意となった。「子育て否定感」は「気分転換」から負のパスを受けていた。また、凝集性およびおしゃべりは「気分転換」を介して「子育て否定感」へ影響を与えていた。

考 察

1. 育児グループ・ひろば参加の効果尺度について

予備調査および中村ら（2002）から収集した



注)**はp<.01, *はp<.05を表す。

Figure 4 子育てクラブにおける統一的・構造的決定因が参加の効果、育児ストレス感に及ぼす影響を検討するパス解析の結果

育児グループ・ひろば参加の効果について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、「気分転換」「悩み・不安解消」「母子の運動性・活発性の向上」「子どもの成長・教育」の4因子が抽出された。

このことから、乳幼児を持つ母親が育児グループ・ひろばに参加することで得る効果には、自宅で子どもと2人きりの状況から息抜きする効果、同年代や少し先輩の母親たちが集まる場に参加し育児をする上で共通に生じる悩みや不安を共有しあい解消する効果、昔ながらの遊びを教えてもらったり、家の中よりも広い場所で開催することによって母子共に活発に遊ぶ効果、同年代の子どもたちが集まる場に参加することで子ども同士が交流し、しつけや社会性の成長面でプラスになるという効果の4側面が存在することが明らかになった。

2. 育児グループ・ひろばの特徴

1) 育児サークル

育児サークルは、その多くが近くに住む母親同士が集まり、自然発生的に出来た集団である。集団の特性として、はっきりとしたルールはあまり無いが、まとまりが強く、サークルの中心となるリーダーがいるものの、それ以外の役割分担はあまりなされていないことが明らかになった。

気分転換や悩み・不安の解消、子どもの社会的な成長をはじめとする参加することによる効果の実感が強かったが、これらは集団の凝集性に拠ることが明らかになった。サークル内で友人関係を構築し、お互いに親密になることで母親同士の会話が増え、リフレッシュや不安の共有と解消が起きると推察される。子どもに関しても、サークル内のまとまりが強い状態では、自然と子供同士も遊びやすく、その結果、協力して遊ぶことやけんかを通して社会性が発達すると考えられる。

また、母子の運動性・活発性が向上することで育児ストレス感が減少することが明らかになったが、特に公園の大規模な遊具を使って活動する外遊びがメインのサークルにおいては、

子どもだけでなく世話をする母親も活動量が増え、子どもと一緒に運動することで育児ストレスの解消につながると考えられる。

2) ひろば

ひろばは、特定のメンバーがいるわけではなく、開かれた場に自由に母親が集い交流し解散していくものである。集団としてのまとまりはサークルほど高くなく、はっきりとしたリーダーも役割も、集団としての構造もないことが示された。これは前述したようなひろばの仕組みによるものだと考えられる。また、参加者が子どもの少ない若い母親が多いという傾向から、初めて子どもを持つ母親にとっても気軽に参加できる、母親同士の交流の第一歩に適した場であると考えられる。

また、サークルと同様、気分転換や悩み・不安の解消、子どもの社会的な成長をはじめとする参加することによる効果の実感は強かった。

集団のまとまりの強さやおしゃべりが多いほど、そしてはっきりとしたリーダーが認識されているほどこれらの効果が高まることが明らかになったが、まとまりの強さやおしゃべりに関しては、やはり他の母子との交流が良い影響を及ぼしていると考えられる。交流を通して悩みや不安を共有し、「悩んでいるのはうちだけではなかった」と安心することで子育てに対する否定感が軽減されるのだと推察する。リーダーの認識に関しては、ひろばはその性格上、参加者の母親の中でリーダーは出来にくい⁹⁾が、参加頻度の高いいわゆる“常連さん”グループのなかでリーダーの役割をする母親が自然と現れると、そのようなグループの中で情報交換することで遊びの種類が増え、また、子供同士が仲良くなり活発性が向上するのでないかと考えられる。

3) 相互保育学級

乳幼児学級は行政が主導となり、メンバーが年度ごとに募集され、役員や班構成もしっかりと決まっている集団である。その仕組みのためか集団のまとまりが高く、ルールや役割、はっ

きりとしたリーダーの存在があることが本研究の結果によって明らかになった。しかし、参加することで得られる効果、特に悩みや不安の解消については低い結果となった。

これらに関して、予備調査中に相互保育学級に関して「預け合いが大変だった」という感想が得られたが、相互保育という性格上、自分の子どもだけではなくペアの子どもにも気を遣わなくてはならず、あまり他の母親と交流する余裕が出来ず結果として効果が薄くなってしまったのではないかと考える。

4) 子育てクラブ

子育てクラブは、全国的な親組織をもち、メンバーやリーダーがはっきりと決まっている集団である。集団としてものもまよりはサークルや相互保育学級より弱い、役割など集団としての構造はしっかりしており、参加率も高いことがわかる。

しかし、気分転換や子どもの社会的な成長といった参加することによる効果は低い。これは、子育てクラブ内での役割は重いがあまり他の母親と親密ではないと感じている母親については、育児からの気分転換も阻害されてしまうためであると考えられる。

一方、子育てクラブ内のもまよりは良く、おしゃべりが多いと感じている母親は気分転換が上手く出来、それによって子育てに関する否定感が弱まっていると感じている。子育てクラブ内全体としては、あまり集団のもまよりは良いと認識されていない傾向にあるが、その中でも他の母子と交流を密に持っている場合、上手く気分転換を図って育児ストレスを軽減させていると考えられる。

3. 総合的考察

本研究では育児グループ・ひろばの特徴とそこへ参加する母親の傾向、およびそれらの場へ参加することの効果や参加者の育児ストレスとの関連を明らかにすることを目的とした。

本研究において、前項で述べたように、4種の育児グループ・ひろばの特徴が明らかになっ

た。なかでも、参加の効果や育児ストレスの軽減に強く関連するのは集団の親密な交流によって生じる凝集性の高さと、集団内での母親の役割であると考えられる。

集団内の凝集性の高さが「気分転換」「悩み・不安の解消」「子どもの成長・教育」効果を増進し、これらの効果が、子育て否定感や子育て疲労感をはじめとする育児ストレスを軽減することが明らかになった。しかし一方で、集団内に果たさなければならない役割がある場合、育児グループ・ひろばへ参加することの効果は阻害され、結果としてストレスの軽減を阻害することも明らかとなった。その点から言えば、育児サークルは集団のもまよりも強く、役割も少ないため、参加の効果が最大に得られるといえる。

しかし、予備調査において「グループの結束が強くて入りづらい」という意見も採集されており、集団内の凝集性が高い場合、新規メンバーの加入を妨げる可能性も考えられる。ひろばは凝集性がさほど高くなく、育児初心者や若い母親も多いため新たな参加者も入りやすいと考えられる。サークル等においても、アットホームな雰囲気でありかつ既存の集団のみで輪を作らず、むしろ新しいメンバーもその輪に引き込む体制であることが望まれる。

4. 今後の課題

本研究においては育児グループ・ひろばの参加者についてのみ研究を行ったため、育児グループ・ひろばに所属せず交流している母親同士については研究の対象外であった。本研究において母親同士の交流の重要性が明らかであったため、今後は育児サークル・ひろば内に限定しない母親同士の交流についても研究を進める必要がある。

本研究では育児グループ・ひろばと育児ストレスの関連を重視して研究を進めてきた。しかし、育児グループ・ひろばを息抜きの場所、育児の骨休め的なものとして見るだけではなく、母親の成長の場として見る視点も必要である。その点からいえば、今回ネガティブな要素とし

て働いた集団内の役割などは、むしろ母親の成長にとっては有益であると考えられる。育児グループ・ひろばに関してさらなる包括的な研究が必要であろう。

引用文献

- 新井洋輔 2004 サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に。社会心理学研究, 20, 35-47.
- 荒木美幸・大石和代・岩木宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美子 2001 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連。長崎大学医療短期大学部紀要, 14, 89-95.
- Evans, N. J., Jarvis, P.A. & Dawson, C. 1986 The group attitude scale: A measure of attraction to group. *Small Group Behavior*, 17, 203-216.
- 広田君美 1963 集団の心理学。誠信書房。
- ホッグ, M.A. 1994 集団凝集性の心理学：魅力から社会アイデンティティへ。広田君美・藤沢等（監訳）北大路書房。
- 子ども未来財団 2004 平成15年度子育てに関する意識調査報告書（概要版）。
- Martens, R., & Peterson, J.A. 1971 Group cohesiveness as a determinant of success and member satisfaction in team performance. *International Review of Sports Sociology*, 6, 49-61.
- 中村敬・小山修・原田正文・松田博雄・山岡テイ・斉藤進・長坂典子・西郷泰之・吉田真理・井深英治 2002 子育てグループ（サークル）活動に関する全国実態調査結果－中間集計結果について－厚生労働科学研究補助金（子ども家庭総合研究事業）「地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究」（分担研究報告書）。
- 園部真美・白川園子・廣瀬たい子・寺本妙子・高橋泉・平松真由美・斉藤早香枝・山崎道子・三国久美・岡光基子 2006 母親の社会的ネットワークと母子相互作用，子どもの発達，育児ストレスに関する研究 小児保健研究, 65, 405-414.
- Stokes, J.P. 1983 Toward an understanding of cohesion in personal change groups. *International Journal of Group Psychotherapy*, 33, 449-467.
- Thomas, E.J. 1957 Effect of facilitative roll independence on group functioning. *Human Relations*, 10, 347-366.
- 泊真児 2000 プライベート空間の心理的機能 筑波大学心理学研究科博士論文（未公開）。
- Van Zelst, R.H. 1952 Validation of a sociometric regrouping procedure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 5, 175-185.
- 山岡テイ 2002 働く母親の育児不安－就業状況・活動状況や支援環境を中心にして－産業カウンセリング研究, 5, 1-9.